ひげのスコープ！
Scope of beard

きょうようときょういくのままに ⑨

東京学芸大学名誉教授　篠原　文陽児

「季節の変わり目です。くれぐれも体調管理にご留意くださいますように」とは、3～4月、6～7月、9～11月頃、筆者のような高齢者は、特に頻繁に使う使われる挨拶であり、表現である。

季節の移り変わる時期は、一日の昼と夜の気温差や月平均の気温の寒暖差が大きく、体温や発汗の調整、呼吸、循環、代謝などが、特に高齢者にはスムーズに行われなくなる。加えて、異動に伴う引っ越し、進学や進級など、大人も子どもも、生活や人間関係を含めた環境に大きな変化が起こりやすい時期と重なり、過度のストレスや生活リズムの変化が生じる。結果として、特に自律神経の乱れが体調を崩す要因の一つになっていると考えられている。

対処法の一つは、できるだけ自律神経のバランスを崩さないように、できるだけ決まった時間に寝起きして食事もきちんと取るなど、規則正しい生活を送ることが何より。つまり、現状をありのまま受け入れることから始まるという。

小学校で新たに導入される「プログラミング的思考」の授業実践と研究の進め方のようむきで、自宅近くの喫茶店にいくことになった。お相手のひとりは小学校長、もうひと方は中学校を退職された、それぞれ長い間の研究同人である。

開口一番、互いの健康を気遣ったあと、教員の力量が今一つでねェ～、昔の教員だったら。また、学校で子どもの落ち着きがなくてねェ～、昔だったら…、ってな具合。グチとため息が行き交う。一方で、高等学校に勤務する、同じく研究同人の英語科教員から次のようなメール。曰く、PCで作文の指導をしていて気づいたこと。①アプリケーション、word、PPTの知識がない、②キーボードが使えない、③イタリックが読めない、書けない、と。

プログラミング的思考あるいはプログラミング教育やPCの活用の教育は、文科省はじめ関係団体や企業等があれやこれや、多数の事例を報告したり公表したりしている。しかし、ことプログラミング的思考の教育実践については、筆者の理解では、まだまだ緒についたばかり。多様化を極める社会と地域及び家庭に大きく依存しつつある学校では、右も左もわからない暗中模索の段階である。

季節の変わり目ならぬ、時代の、社会の変化の真っただ中。先も足元さえ不透明、何事も予測不能。

ここは一つ、目の前の児童生徒や教師の今をありのまま受け入れ、あらゆる事象を丹念に観察し記述し収集し共有する**記述・調査研究**が必要と、意見の一致。ていねいな問診作業を、である。C.レヴィ＝ストロース、M.メルロ＝ポンティ、J.ピアジェ等の認識論やC.ロジャースが手招きする。変化の中のプログラミング的思考やPC活用の実践研究及び教師教育の原点回帰を、より有意義にするかのような手掛かりの一つが垣間見える。

視聴覚教育は、1946年再発足した現日本視聴覚教育協会の前身である日本映画教育協会の活動と、1954年視聴覚教育研究協議会の１週間のAVセミナーで各大学等担当者が持ち寄った現状報告の数々、1956年E.デールの複数回の講義と全国８か所での講演会開催、書籍の出版。こうした黎明期、啓蒙期を通じて今日までも継続している事業や事例の収集と分析が、教育工学を導き、今日の視聴覚教育の基礎と発展を揺るぎないものにしている。